

50 年前の夜間中学生肉声データ再発見とその意義

Rediscovery of Night Junior High School Student Voice Data Recorded 50 Years Ago and Its Significance

水 本 浩 典
MIZUMOTO Hironori

は じ め に

本稿は、夜間中学をテーマにした数編の映画を素材に、50 年前に自主制作したドキュメンタリー映画を背中に背負って全国行脚し各地で上映会を開催した高野雅夫の意図と他の映画（本稿では、2 編のドキュメンタリー映画と 1 編の商業映画）を参考にしながら、その特徴と制作意図を探っていくことを目的としている。

なぜ、50 年前に東京都立荒川中学校二部（当時）の卒業生であった高野雅夫が思い立って極めて短期間に、しかも自らの手で 43 分の 16 mm フィルムに編集した証言映画『夜間中学生』。この映画の制作上の特徴を抽出するための貴重な資料が高野雅夫が大切に保管してきた、いわゆる高野資料中に関係資料が残存している事実を指摘する。そして、この『夜間中学生』という映画を理解するうえでも貴重な資料となり得ることを提示していく。

1. 夜間中学を取り巻く、今

2016 年 12 月、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律（略して、教育機会確保法）」が成立した。この法律が成立するまでには様々な紆余曲折があり、多くの市民団体や全国夜間中学校研究会などの地道な活動と訴えの成果でもあった¹⁾。この法律の主眼は以下の 2 点にある。

①不登校児童生徒に対する教育機会の確保

②夜間其の他特別な時間において授業を行う。

そして、学校における就学の機会の提供に関する施策及び教育機会の確保などである。

この法律が制定される背景には、全国に義務教育未修了者が少なくとも 12.8 万人存在している事実。そして、近年、不登校児童生徒が増加しつつあるという現実。そのうえ出入国管理法改正による外国人の数の増大などが存在する。

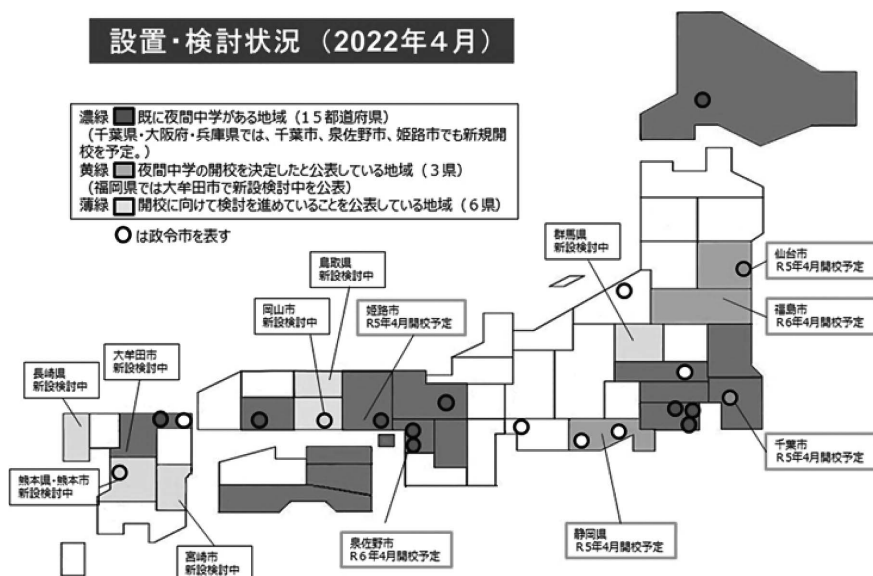


表 1 2022 年度に設置されている全国の夜間中学リスト

都道府県	設置主体	学校名	都道府県	設置主体	学校名
北海道	札幌市	星友館(せいゆうかん)中学校【令和4年4月開校】	京都府	京都市	洛友(らくゆう)中学校
茨城県	常総市	水海道(みづかいどう)中学校			天王寺(てんのうじ)中学校
埼玉県	川口市	芝西(しばにし)中学校陽春(ようしゅん)分校		大阪市	天満(てんま)中学校
	市川市	大洲(おおす)中学校			文(ふみ)の里(さと)中学校
千葉県	松戸市	第一(だいいち)中学校みらい分校			東生野(ひがしいくの)中学校
				岸和田市	岸城(きしき)中学校
	足立区	第四(だいよん)中学校		堺市	殿馬場(とのばば)中学校
	荒川区	第九(だいきゅう)中学校		豊中市	第四(だいよん)中学校
	江戸川区	小松川(こまつがわ)第二中学校		東大阪市	布施(ふせ)中学校
	大田区	糞谷(こうじや)中学校			意岐部(おきべ)中学校
	葛飾区	双葉(ふたば)中学校		守口市	さつき学園
	墨田区	文花(ぶんか)中学校		八尾市	八尾(やお)中学校
	世田谷区	三宿(みしゆく)中学校		樺原市	畝傍(うねび)中学校
	八王子市	第五(だいが)中学校		天理市	北(きた)中学校
	川崎市	西中原(にしなかはら)中学校	奈良県	奈良市	春日(かすが)中学校
	横浜市	蒔田(まいた)中学校		尼崎市	成良(せいりょう)中学校琴城(きんじょう)分校
	相模原市	大野南(おおのみなみ)中学校分校【令和4年4月開校】	兵庫県	神戸市	丸山(まるやま)中学校西野(にしの)分校
					兵庫(ひょうご)中学校北分校
			広島県	広島市	観音(かんおん)中学校
					二葉(ふたば)中学校
			徳島県	徳島県	徳島県立しらさぎ中学校
			高知県	高知県	高知県立高知国際(こうちこくさい)中学校
			香川県	三豊市	高瀬(たかせ)中学校【令和4年4月開校】
			福岡県	福岡市	福岡きぼう中学校【令和4年4月開校】

このように数年前には 30 校ほどであった夜間中学は、現在では 40 校に増え、数年後には 50 校に迫る勢いで新設・設置が検討されている。2022 年現在、全国の自治体は競うあうように夜間中学を新設し、準備をしている。しかし、そこには大きな問題点が存在している。それはどれほどの人たちが夜間中学での学びを希望しているのか、ニーズ調査がどれほどされたのか、という点である。

例えば、兵庫県姫路市は、2023 年 4 月から新設の夜間中学＝姫路市立あかつき中学校を開校しようとしている。そのために、姫路市は、「夜間中学体験会 in 姫路」を 2021 年 4 月に開催している。目的は、夜間中学について周知を図るとともに、市内及び周辺地域の入学希望者のニーズ等の把握のためであった。参加対象者は、

1. さまざまな理由で義務教育を受けることができなかった人（義務教育未修了者）
2. 不登校などにより十分に学校で学ぶことができなかった人（不登校生徒）
3. 本国において義務教育を修了していない外国籍の人

である。

新聞報道によると、男女合わせて 13 名ほどの参加者がいたことがわかる⁵⁾。この記事を見ると、「入学希望者のニーズ等の把握のため」に実施した催しであった。

姫路市は、2021 年 12 月に「姫路市立夜間中学設置基本計画（案）」（作成：姫路市教育委員会）を公表している。それによると、姫路市内には、潜在の対象者として、①義務教育未修了者は 621 名（2010 年の国勢調査に依拠）、②不登校生徒は 756 名、③在住外国人は 11,331 名（住民基本台帳に依拠）、存在していることをニーズの基礎にしている⁶⁾。

これに従って、2022 年 3 月に基本計画作成。2022 年 5 月には学校説明会、体験会の実施、7 月

から入学説明会、そして、2023 年 4 月に「開校式」を実施するスケジュールを公表している。

この基本計画を見ても、姫路市が独自に夜間中学入学希望者の実数を把握するための調査してはいないようである。①から③の「ニーズの基礎」として提示している数は、国勢調査データや各学校が上申した「市内中学校の長期欠席」者数であったり、住民基本台帳に記載された「在住外国人」数である。それぞれに該当する方々のなかに、どの程度夜間中学入学希望者がいるのかについては調査を行っていないようである。

つまり、かつては「あってはならない学校」として義務教育制度の片隅にあった夜間中学については、潜在的な夜間中学入学希望者についての調査も実施していない場合が多い。いや、調査方法も把握方法もルール化されていないのが実情である。

既に、文部科学省は、2015（平成 27）年 7 月に、「義務教育修了者が中学校夜間学級への再入学を希望した場合の対応に関する考え方について（通知）」を各都道府県教育委員会及び各政令指定都市教育委員会宛に発信している。しかし、2021 年に策定した姫路市の「姫路市夜間中学設置基本計画（案）」では、この文部科学省の「通知」にある「義務教育修了者が中学校夜間学級への再入学を希望した場合」=いわゆる「形式卒業者」は潜在的入学希望者の範疇に入れてもいない。このような「形式卒業者」の夜間中学への再入学希望は、ある程度存在すると考えているからこそ、文部科学省は「通知」を発信したはずである。しかし、該当「形式卒業者」（本人が自分は「形式卒業者」であると自認しているか、否かも定かではない場合も多いと考えられる）に、どのようにして再入学の希望があるかを調査し把握するのか、その方法すら明確ではない。

次に、続々と新設されていく夜間中学の教員にどのような教員が充当されているのだろうか。ここでは、埼玉県の川口市立芝西中学校陽春分校と千葉県松戸市立第一中学校みらい分校の場合をみていきたい。

二つの夜間中学は、兵庫県下における夜間中学と同じように分校方式を採用している。これは、同一中学校内に夜間学級として設置するより、分校として設置したほうが学校教育法の設置基準から教員配置数が多く教育上有利であると判断したことによると推測される。そして、その入学条件は、以下の 4 つをあげている。

- ①小学校や中学校を卒業していない人
- ②中学校を卒業した人のうち、学び直しを希望する人
- ③原則、在留資格のある外国籍の人
- ④夜間中学の生活に支障がない人

②において、文部科学省が出した通達（前述）に準拠して、いわゆる「形式卒業者」も「学び直し」を希望する者は受け入れることを明記している。③では、日本に定住している外国籍の者も夜間中学で学べることになる。これは、それ以前に設立された夜間中学においても同様な措置が取られている。

それに対して、学校側は以下のような教育を行うとしている。

- ①授業は、年間 200 日、週 5 日
- ②中学校の教科を勉強

③教員免許を持っている教員が教える

④卒業証書がもらえる

⑤授業料がかからない

以上の5項目のうち、②の「中学校の教科を勉強」とある。しかし、夜間中学に入学を希望する者の多くは中学校に入学可能な程度の学力も保持していない場合も多い。そのような生徒にどのようなように「中学校の教科を勉強」させるのか、課題も大きいと感じられる。それは、③で「教員免許を持っている教員が教える」と明記していることとも繋がる課題でもある。埼玉県も千葉県も上記2校の夜間中学は県下で初めて設置する夜間中学である。つまり、2県には夜間中学で教えた経験を持つ教員はいないと考えられる。そのため、③を実施することは、県下の昼の中学校で教えた経験だけを持つ教員が配属されることになる。学校教育法によって学校の「教員」資格は厳密に設定されている。資格を持たない者が学校において教育をすることは日本では許されない制度になっているのである。

川口市にも松戸市にも、いわゆる「自主夜間中学」といわれる組織が長年運営されてきた。川口自主夜間中学（2022年で37周年を迎える）や松戸自主夜間中学（2022年には開校40年目を迎える）が営々と学びの機会を失っていた方々に学びの場を提供し続けている。

埼玉県内に初めての公立夜間中学ができるまで多大な尽力を惜しまなかった川口自主夜間中学の野川義秋は、産経新聞の記者に次のように答えている。

県内初だけに、先生たちも勝手が分からないはずだ。私たちは長年、自主夜間中学の運営に携わってきたので、ノウハウがある。今後、市に積極的に働きかけてスタッフの派遣などを行っていききたい。⁷⁾

しかし、開設された川口市立芝西中学校陽春分校と川口自主夜間中学とが密接に連携して新しくできた夜間中学の運営にあたっているといった情報は得られていない。

夜間中学に集う生徒は非常に多様性に富んでいる。ある生徒は中学校1年生程度の学力もない。昼の中学校生徒と比べても学力不足が歴然としている場合もある。そのような生徒に上述のように「中学校の教科」を円滑に「勉強」させるためには、一定の配慮が必要になる。就学年齢も学齢期の生徒から高齢者まで、年齢層は幅広い。昼の中学校の生徒が1年生から3年生まで同年齢の生徒がクラスで一斉に同一の勉強するのは、まったく違った授業環境が出現する。在日外国人子弟が入学してきた場合は、当初から言語の問題が随伴する。生徒も日本社会に順応するために、まず日本語の習得を優先する姿勢が強い。

このような様々な問題点について、昼の中学校在勤の教員の多くはどのような対応をすれば適切な教育実践が実現するのかノウハウを持っていない場合が多い。文部科学省も都道府県・市の教育委員会も夜間中学における教育実践についての蓄積はない場合が多い。

「九九を知らない中学校卒業生」に、どうやって中学校の教科を教えるのか。夜間中学教育に情熱を傾けた教員の弛まぬ教育実践のノウハウに拠るしか方法がないのは、自明の理である。

筆者が手にすることができた夜間中学において実際に授業で使われた教科書や副教材は、昼の中学校が使用している教科書は使われていない。むしろ小学校の教科書を基礎に、教員が自分で作成したプリント教材を使った学習が主に行われていた。学力別にクラス編成を替えることも行われている（昼の中学校では、ある程度学力が揃っているため、学力別編成などは行われていない）。そして、生徒一人一人の学力に応じた個別学習や興味を持たせるための授業の模索も行われている⁸⁾。

全国夜間中学校研究会が毎年開催している研究大会を記録した『研究大会資料』は、現在に至るまで、夜間中学での教育実践上の問題点・課題などを連綿と提示してくれており、学ぶべき点が多い。

また、元守口夜間中学の教員であった白井善吾がネット上に発信し続けている夜間中学に関する多様なテーマには、夜間中学における教育実践や課題について学ぶことができる貴重なデータとなっている。

・「夜間中学の今」（2006・2007年度 計100回）

・「夜間中学その日その日」（2008年度～現在、800回を超える）

そこには、白井が実践した授業、教材開発例など、夜間中学生への思い、願い、活動が記録されている⁹⁾。しかし、ほとんどこのような貴重なデータ発信を継承しようとはされていないのが残念である。

このように、昨今全国的に次々と新設される夜間中学の教育については課題が多いことを指摘した。次節では、過去に夜間中学をテーマに記録された映画（ドキュメンタリー映画や商業映画）のなかでは、夜間中学はどのように表現されているのかを見ていく。

2. 夜間中学映画は何を語る

2-1 『こんばんはⅡ』

2019年、夜間中学をテーマにしたドキュメンタリー映画が作られた。制作は、夜間中学校と教育を語る会。監督は、2003年封切の『こんばんは』を撮った森康行。ナレーターを大竹しのぶが担当している。カラー作品、37分の作品である。「文部科学省選定」映画にもなっている。

制作意図は、監督である森自身が語ったもの¹⁰⁾があるので、それを参照しながら、まとめてみたい。

冒頭で、森はこの映画の制作について次のように書いている。

今回は、“一刻も早く”という完成させなければならないという大きなテーマがかけられた。（中略）何よりもまだ夜間中学に巡り合っていない多くの人たちへ、その存在を知らせたいと心の底から思っている先生方や関係者の熱意に動かされ、この映画は完成したのである。

そして、撮影の過程で知った「柏自主夜間中学」、「松戸自主夜間中学」のこと、そして、カンボ

ジア難民の女性のことなど、『こんばんはⅡ』に出演した夜間中学の生徒や自主夜間中学に通う方のエピソードが語られている。

ドキュメンター映画『こんばんはⅡ』は、森がインタビュアーを担当し、撮影も担当するかたちで撮影された映画である。つまり、森がドキュメンタリーとしての構想を練りに練って長時間かけて撮影し完成させたものではないことがわかる。制作者として名称が出てくる「夜間中学校と教育を語る会」のある意図を具現化するための映画であった。このことは、『こんばんはⅡ ホームページ』としてネット上に公開されている情報からも読み取ることができる¹¹⁾。

まさにドキュメンター映画『こんばんはⅡ』は、日本各地で上映会を開催し少しでも多くの方に夜間中学の存在を認識してもらうことを企図した映画であったことがわかる。これは、全国キャラバン上映会の開催を計画していることからわかるように、潜在的に存在する義務教育を修了していない者が全国に 100 万人以上存在することを前提に、そのような人々に、夜間中学の存在とその学びを少しでも認識してもらいたいと願ってのものであることがわかる。

そこに登場する夜間中学生や夜間中学卒業生、そして、自主夜間中学で学ぶ方々は、いずれも表情も明るく夜間中学で学んだことを心から喜んでいるように見える。まさに、夜間中学を啓発するためのキャンペーン映画とも評することができる内容となっている。

しかし、そこに描かれる夜間中学は、どのような夜間中学が必要なのか、どのような生徒を受け入れるのか、どのように教えるのか、といった野川が提起したような夜間中学にとって必須の課題は描かれていない。『こんばんはⅡ』からは、夜間中学が今日なお必要なのか、昼の中学校ではなぜダメなのか、夜間中学での学びとは何か。といった夜間中学にとって避けて通ることができない課題について問題提起する姿勢はない。

夜間中学に学ぶ生徒がインタビューに登場するが、その明るい笑顔と発言からは、夜間中学の門をくぐるには、強烈な覚悟と勇気が必要であったであろうことや、自分の過去を見つめ直す姿勢などを語るシーンはない。

あくまで夜間中学を啓発する目的の映画であり、そこに強烈なメッセージはないように感じられた。

2-2 『こんばんは』

2003 年に上記で言及した森康行が制作したドキュメンタリー映画。カラー、92 分。DVD のパッケージ裏には、次のような文章が書いてある。

映画の舞台は、墨田区立文花中学校夜間学級。様々な理由で義務教育を受けられなかった人たちが、年齢や国籍の壁を越え、互いに助け合い学んでいます。受験戦争のための勉学ではなく、生きるために学ぶ真摯な姿。そこには、不思議なやさしさと温かさに包まれた、今まで出会ったことのないような学校があった……………

16 歳から 92 歳までの生徒が通う東京都の夜間中学。戦争で教育を受けることができなかった

人。外国からの帰国者。不登校者、義務教育未修了者が、“学ぶ”ことの楽しさや友情を育む場所＝夜間中学。日本で初めて夜間中学の現場で教員をはじめ生徒の、ありのままの姿をドキュメンタリーにしたこの『こんばんは』は、2003年度キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位受賞作であり、その他多くの賞を取った作品でもある。

日本の現行教育制度のなかで、特に中学校という義務教育現場にひっそりと存在している夜間中学を真正面からとらえた記録映画である。森は、この映画を構想して後、1年近く交渉し夜間中学の承諾を得てカメラを持ち込み、1年半もの長期にわたって撮影し92分のドキュメンタリー映画として完成させた。

特に、後述の山田洋次監督作品『学校』の主人公となる黒田先生のモデルの一人と言われる見城慶和元夜間中学教員に焦点を当て、夜間中学に集う生徒の様子を記録した画面からは、夜間中学で和気あいあいと楽しく学ぶ生徒と先生のふれあいと日々の授業風景がそこにある。そこには、昼の中学校とはまったく違う夜間中学だけに存在する授業風景がある。数多くの賞を獲得したことも頷ける映画である。

2-3 『学校』

1993年に封切した山田洋次監督の『学校』は、商業映画としても大ヒットした夜間中学をテーマにした作品である。

様々な夜間中学生がそれぞれの幸せを追い求める群像劇である。必死で働いてきたハルモニ（韓国・朝鮮語で、おばあさん）、中国残留孤児の帰国者、年少から働きづめの中年日本人、昼、清掃業で働き疲れ切った青年、家庭問題から非行に走った少女、不登校だった少女、知的障がいがある青年、そして、教育委員会が定める年限を超えると他校へ異動するという転勤ルールを蹴って同じ夜間中学に勤め続ける教員。それら7人の夜間中学生と教員たちを交えたエピソードでストーリーは展開する。

現在（2022年度）も膨大な夜間中学関係資料を整理する過程にある高野雅夫資料のなかに、映画『学校』の脚本1冊が存在している。その冒頭に次のような山田による文章がある。

は じ め に

公立の夜間中学は、現在全国に35校、その他に有志のボランティアによって運営される自主夜間中学が数校存在する。

この夜間中学を舞台にした『学校』の企画は15年前にスタートし、廣澤榮氏によって最初の脚本が書かれたが、種々の事情で実現せず、長い年月を経てふたたび、朝間君と共同で新しい脚本を書き、映画化が決った。

15年前、当時会長だった故城戸四郎氏が、この作品の実現を強く望んでおられたことを、今、感慨深く思い出すのである。

この脚本は、もちろんフィクションである。しかし、ぼくたちは沢山の素材やアイディアを、塚原雄太、見城慶和、松崎運之助の諸氏をはじめ、多くの夜間中学の先生たちの尊い実践

の記録や著作から得ているし、また長い年月にわたる夜間中学の卒業生たちの作文から学んだことも数知れない。

すべての夜間中学に関わる人々に、心からの感謝を捧げつつ、今ぼくたちは『学校』の撮影を開始する。

一九九三年二月二〇日

山 田 洋 次

この脚本冒頭に挿入された山田の文章が、映画『学校』の制作の動機を雄弁に語ってくれている。脚本では、シーンは102存在している。この102ものシーンの積み重ねが映画『学校』として具現化したことになる。映画『学校』は、さまざまなエピソードの積み重ねで成り立っている。

孫もいる在日韓国人女性のオモニ、不良少女のみどり、昼間は清掃の仕事で働き夜間中学に通うカズ、小児麻痺で言語が不自由な修、中国から帰国した残留孤児だった青年。登校拒否をして両親が困っているえり子、中年になってやっと夜間中学で学び始めたイノさん。この7名の夜間中学生と夜間中学教員の黒田先生との交流を描く作品である。

この映画は、西田敏行演じる黒井文夫が主演であるが、もう一人主人公が存在している。それが田中邦衛演じる猪田幸男（イノさん）だ。山形から東京に出て来て働きづめに働いて、やっと偶然知り合った若い医師に付き添われて夜間中学の門をくぐる。緊張のあまり酒を飲まない夜間中学に行けなかったイノさんと黒井先生とのやりとりのなかに、夜間中学の門を叩き入学を決意するには、非常に大きな勇気と決断が必要だったという夜間中学生の現実を撮っている。

そのイノさんの病気が進み、最後は故郷の山形に帰っていく。イノさんの訃報を聞いた黒田先生がクラスの生徒たちにそれを告げる（脚本ではシーン92が該当する）。その後、修学旅行の思い出のシーンが続き、最後にもう一度「夜間中学・黒井学級」にシーンに変わる。ここでクラス全員による「幸福」についてのディスカッションが続く。脚本では8ページにわたっている。山田はここでクラスの夜間中学生たちの「学び」の本質について様々な角度から考える時間を撮っていると考えられる。授業の最後に、黒井先生が次のように発言して締めくくる。

俺が今、思っていることはいい授業だったということだ。そして授業と言うのはクラス全員が汗をかいて、一所懸命になって作り上げるものだと言うことなんだ。それがよくわかったよ。どうもありがとう。

黒井先生が深々と生徒たちに対してお礼をいうシーンで、「顔を見合わせる生徒たち」がト書きに書いてある。授業の終わりに、生徒に対して「どうもありがとう」とお礼（挨拶）を言う教員を現実にはあまり知らない。

山田の描く夜間中学の世界は、最後に不登校だったえり子が夜間中学を卒業した後、高校から大学、それも教育学部を目指し、「先生の資格をとったらね、この夜間中学に帰って来てここの先生になるの」と黒井先生に語るシーンが映画の最後の部分にある。夜間中学で学ぶことは、夜間中学

生がそれぞれの「幸せ」をつかむために勉強する場であると山田自身の主張を発信しているように思える。

3. 夜間中学になぜ入学するのか—高野雅夫の告発—

本来、義務教育の教育は昼の小・中学校でおこなうことが原則となっている。憲法第 26 条に、

すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

とある。この憲法に依拠するかたちで、1947 年学校教育法が制定される。戦前の普通教育の複雑な教育制度を整理するかたちで、小学校 6 年の延長上に、中学校が設定された。

中学校の修業年限は、三年とする。(学校教育法第 37 条)

その結果、普通教育は、小学校 6 年、中学校 3 年、計 9 年間が義務教育期間となった。そこには、高等学校のように、夜間の教育も考慮して、学校を昼に教育を実施する全日制と夜に教育を実施する定時制に分けるような制度設計はなされていない。

すなわち、中学校の教育は昼の中学校において実施することが大原則であった。

しかし、戦後の混乱期には、多くの年少者が家庭の困窮などの諸事情で昼に就労する場合が多かった。そのため、憲法が規程する義務教育を完全には実施できていない時期が長く続くことになった。

そうしたなか、戦後 20 年以上経過した 1966 年 11 月に、当時の行政管理庁が「年少労働者に関する行政監察」を勧告する。この勧告文全文を見ようとすると、思わぬ苦労が付きまとう。それは、どこにも全文を提示して論じた論文がないのである。夜間中学関係で最も関係するであろうと推測した全国夜間中学校研究会が毎年開催する研究大会をまとめた『大会資料』にも全文を掲げた資料を見出すことはできない。唯一、『第 50 回全国夜間中学校研究大会記念誌』に引用があるが、これも全文ではなく、あくまで夜間中学に関係する部分を提示するための抄録資料として掲載されている¹²⁾。

そこでこの勧告文の内容を掻い摘んで提示すると以下ようになる。

年少労働者に関する行政監察

(1) 監察実施の目的

年少労働者（全国で約 156 万人）については、最近における進学率の上昇等による若年労働力の不足、年少労働者の大都市への流入、作業の単純化による仕事に対する意欲

の喪失、安易な離転職の増加の傾向がみられるほか、小規模事業や、商業の接客業では、いまなお劣悪な労働条件や環境のもとで就労しているものがみうけられ、これらの諸事情は、非行青少年の増加の一因ともなっているなど、幾多の問題が内在している。

この監察は、このような状況にある年少労働者に関する職業紹介、労働保護、教育訓練ならびに、福祉等の行政施策の状況を調査しその運営の改善に資することを目的としたものである。

- (2) 監察担当機関（中略）
- (3) 監察（調査）実施期間 昭和41年1月～3月
- (4) 監察（調査）対象 労働省、文部省、厚生省、警察庁（以下、後略）
- (5) 監察結果の処理

監察の結果、改善を要すると認められる事項については、昭和41年11月29日労働省、文部省、警察庁に対し勧告した。

勧 告

1 職業紹介について

- (1) 新規中学卒業者の広域職業紹介について

新規中学卒業者の地域的な需給の不均衡がいちじるしく、（中略）いまだに直接募集等の不公正が求人活動を行なっているものがみられ、十分改善されていないので、次の点について改善するよう指導し、紹介秩序の維持に努める必要がある。（労働省）

- ア 中略
- イ 中略
- ウ 中略

（説明）略

- (2) 職業指導および定着指導について

中学校において行なう職業指導および公共職業安定所で行なう就職後の指導や定着指導が十分行なわれていないものがあり、（中略）次の事項を改善するよう指導し、年少労働者の就職の安定をはかる必要がある。

- ア 中略（文部省）
- イ 中略（労働省）
- ウ 中略（労働省・文部省）

（説明）略

2 労働保護について

- (1) 労働保護のための監督指導について

（前略）いまだに労働基準法規に定められている最低労働条件が遵守されずに就労し

ている年少労働者がかなりみられるので、次の事項について改善の要がある。

ア 中略（労働省）

なお、（中略）（労働省・警察庁）

イ 中略（労働省）

ウ 中略（労働省）

（説明）略

（2）義務教育就学者の就労について

義務教育就学者を新聞販売業等に雇用しているものが多いが、（中略）教育上支障をきたしているものがみられるので、次の事項について改善をはかる必要がある。

ア 中略（労働省）

イ 家庭が貧困などのため、昼間就労し夜間通学している。いわゆる「夜間中学校」については、学校教育法では認められておらず、また、義務教育のたてまえからこれを認めることは適当ではないので、これらの学校に通学している生徒に対し、福祉事務所など関係機関との連携を密にして保護措置を適切に行ない、なるべく早くこれを廃止するよう指導すること。（文部省）

（説明）

最近、義務教育就学者で就労しているものが多く、全中学生の約 5% の 30 万人前後が常時、または臨時に就労していると推定されている。（後略）

1 略

（1）略

ア 略

イ 略

ウ 略

（2）略

2 貧困家庭などのため、昼間就労し夜間義務教育を受けているいわゆる「夜間中学校」は昭和 24 年生活困窮家庭の長欠生徒を救う方便として一部大都市に設けられ、昭和 28 年には全国で学校数 71 校、生徒数 3,118 人を数えるにいたった。その後減少の傾向をみせたが、現在なお全国で 27 校（在籍生徒 558 人）存在している。

夜間中学に通学した動機は貧困、家庭の無理解によるものが約半数であるが、これらに対する教育委員会および学校の指導は十分行なわれていない。すなわち、夜間中学生には福祉事務所と連絡のうえ救済措置をとる必要があるもの、または、保護者に対する指導の必要があるものなどがあるが、学校では家庭訪問をしたこともなく、また教育委員会においても昼間学校への復帰について指導もしていないものが多い。

このような義務教育の夜間制は変則で、学校教育法にも認められない臨時的措置であり、また、生徒数が減少し一校 20 名～50 名程度存続理由が薄くなっているため、これ

ら夜間中学生徒に対し昼間の学校に通学できるよう保護措置を講じ、夜間中学はできるだけ早く廃止するよう指導する要が認められる。

3 勤労青少年の教育・訓練について

(1) 勤労青少年の教育について

中略

ア 略 (文部省)

イ 略 (文部省)

ウ 略 (文部省、労働省)

エ 略 (文部省)

(説明) 略

(2) 職業訓練と学校教育の連けいについて

略 (労働省・文部省)

(説明) 略

(3) 職業訓練終了者の処遇について

略 (労働省)

4 宿舍施設について

略 (労働省)

ア 略

イ 略

ウ 略

(説明) 略

この勧告に対して、労働省は 1967 (昭和 42) 年 8 月 29 日に回答し、その後の改善措置についても 1968 (昭和 43) 年 5 月 28 日に回答している。文部省は、1967 (昭和 42) 年 9 月 18 日に回答し、その後の改善措置について 1968 (昭和 43) 年 7 月 27 日に回答している。警察庁も、1967 (昭和 42) 年 3 月 29 日に回答している。その後の改善措置についての回答はなかったようである¹³⁾。

このように「年少労働者に関する行政監察」の勧告は、多岐にわたっており、勧告対象もそれぞれの項目ごとに、労働省、文部省、警察庁と分けて具体的に指示してある。つまり、この勧告が、夜間中学だけをターゲットにした勧告ではなかったことがわかる¹³⁾。

しかし、この勧告文を文面通り読めば、廃止する前提として「福祉事務所など関係機会との連けいを密にして保護措置を適切に行ない」しかる後に「なるべく早くこれを廃止するよう指導する」と書いている。「早期廃止」を性急に勧告した文面であると理解することはできないように思える¹⁴⁾。

この勧告に呼応したと思われる夜間中学教員の反応を記した本がある。塚原雄太が著わした『夜間中学－疎外された「義務教育」－』のなかで言及した箇所である¹⁵⁾。塚原は、文部省の要請に答えて、1968年段階で自分が勤めている夜間中学の在籍生徒、12歳－1名、13歳－8名、14歳－11名、15歳－8名、(学齢超過者)10歳代－12名、20歳代－4名、26歳－2名、計46名について、その家庭環境や就学事情などを検討した結果として、「どのようにしたら夜間中学生が昼間の中学校に通えるようになるだろうか」と書いている。

そして、塚原は、以下のような結論を提示している。

- ・ どの生徒も、簡単には昼間部への転校はできそうでもなかった。
- ・ 夜間中学生の背負った荷物の重荷を知るべき。

そして、日本で最も早く夜間学級を開校した神戸市立駒ヶ林中学校の校長・教員の証言として、「仕事が終わった夜間なら、何とか出席できるという生徒たちの悲痛な叫びをくみ取った」とあることに留意すべきと書いている。

大多和は、この行政監察の影響を、夜間中学の減少数に着目して、こう述べている。

夜間中学校の学校数は、勧告が出された1966年度には26校あったものが、文部省による再回答が出された1968年度には21校と短期間で減少しているため、この勧告が市町村教育委員会や学校現場になんらかの影響を与えたことは推測され、少なくとも、設置義務があるわけではなく、さらに教育条件のうえでも諸問題を抱える夜間中学校を学校や設置自治体が廃止する根拠とはなり得たのではないだろうか。¹⁶⁾

と、一定の影響があったと推測している。

この「年少労働者に関する行政監察」に、鋭敏に反応した人物に高野雅夫がいる。高野は満州からの引き上げ者で、しかも孤児という境遇のなかで辛酸を嘗めた少年期を送り、20歳を過ぎてやっと荒川区立荒川第九中学校二部に辿り着いた。まさに、やっとのことで義務教育の恩恵を受ける立場になったわけである。後年、高野は、「荒川九中卒業生」を自分の肩書にしているほど、夜間中学卒業者であることを誇りにしている。

高野がこの行政監察による勧告に危機感を覚えた結果、恩師である塚原雄太に相談し、夜間中学をテーマにした映画の制作を持ちかける。この塚原と高野の出会いは、塚原の本のなかに描かれている。高野は言う。

先生、先生は行政管理庁の勧告をどう思いますか。

勧告が出たのは、1966年11月29日であった。塚原が高野に相談を持ち掛けられたのは、「昭和41年の12月も押し迫った日」であったという。約1カ月の間に、高野はその後の行動計画を練っ

ていたことになる。それでは、市井にあった高野が行政管理庁の勧告内容を何によって知ったのであろうか。高野の自叙伝的性格を持つ『자립』のなかでは、そのきっかけについては何も語っていない。同著 32・33 ページに「年少労働者に関する行政監察」と表題にある勧告文が見開き 2 ページに掲載されている。そこには、

左記のものは昭和四一年十一月行政管理庁、行政監察局より文部省に対して勧告されたものの勧告要旨と同説明文である。

とあり、勧告文として、よく引用される夜間中学に言及した箇所が説明文とともに提示されている。末尾は、「行政管理庁長官 松平勇雄」とある¹⁷⁾。

この勧告文そのものを高野が入手して、その内容に危機感を覚えたとも考えられるが、『자립』ではそのへんの事情についての言及はない。最も手近に情報を入手できたのは、新聞、テレビ、ラジオによる場合が多いと考えられる。そこで、当時の新聞には、この勧告をどのように報道したのかを調べてみると、毎日新聞にこの勧告文を紹介した記事のなかに以下のような夜間中学に言及した文章がある。

「現状、非行化に拍車」 年少労働で 行管庁が指摘
「トルコぶろ、バー、キャバレーなど、十八才未満の年少者が働くことを禁止されている職場に対する労働省の監督、指導は十分行われていない」「義務教育に就学中の生徒を雇っている職場では労働法規に違反しているケースが多い」「学校教育法では認められていない“夜間中学”は廃止すべきである」—など行政管理庁は三十日、同庁が行った年少労働者に関する行政監察に基づいて労働、文部両省及び警察庁に勧告を行う。(以下、中略)

また、家庭の困窮や無理解から、昼間働いている生徒のために開かれている“夜間中学校”は全国で二十七校(生徒五百五十八人)だが“夜間中学校”は学校教育法では認められていないので、なるべく早く廃止し、生徒は就学援助などの保護措置をして昼間学校へ復帰させるよう勧告している。(後略)¹⁸⁾

高野は、このような新聞記事から行政管理庁の勧告を知った可能性が推測される。通常は、高野のような夜間中学で学んだ経験を持つ卒業者は激しく憤るか声高に非難を口走るなど、個人の感情の湧出に留まるとされる。しかし、高野は違っていた。

結果、高野は恩師塚原に、「夜間中学生の現実の姿をぶっつけてやりたい」ため、「映画をつくる」ことを提案する。この提案は、荒川第九中学校二部の教員の賛同も得て、学校としても協力する体制ができあがる。当然のように在籍中の夜間中学生も進んで協力した。その結果、「撮影期間は 42 年 1 月から 3 か月。出演者は母校の全員。」そして、30 数万円の制作費用は高野が拠出することで実現をみた¹⁹⁾。

4. 塚原雄太と高野雅夫が撮影し、高野一人で編集完成させた映画『夜間中学生』

高野資料のなかに、全25冊になる写真アルバムがある。これらの資料は、膨大な高野資料のなかにある写真資料を時系列に整理し直し、アルバム帖に収納した資料群である。この整理は、大阪の長栄夜間中学において「うりそだん」の教室が開られない日に、白井善吾をはじめ有志が集まって整理作業と目録作りを続けた成果のひとつである。アルバム帖への整理作業には高野雅夫本人も参加し、随所に写真のキャプションや短い説明、写真に写る人名などをメモしていった²⁰⁾。まさに、この25冊の写真帖は、高野が学んだ荒川第九中学校二部の50年前の夜間中学生たちの写真や

学びの様子、そして、証言映画『夜間中学生』の制作、完成した映画を背中に背負って全国行脚する高野。そして、その後の高野の行動の軌跡を記録した貴重な写真群である。

高野資料は、現在までも非公開の方針を高野本人が堅持しているため、ほとんど知られていない。戦後の夜間中学の歴史を研究する際は必須の資料群だと言える高野資料抜きには、正確な夜間中学の歴史を著述することは不可能と言っても過言ではない。

この写真帖第4冊（背文字に印字されたタイトルに「4」とある）には、表紙に、

証言映画「夜間中学生」67年1月～6月 自主
制作荒川九中夜間 取材カメラ TBS 岡本弘^{ママ}



図2 資料ボックスに収納したオープンリールテープ類（第1箱）

高野によって、それぞれのテープにはインタビューした対象者名や状況などのメモが書き残されている。



図3 資料ボックスに収納したオープンリールテープ類（第2箱）



図4 オープンリールテープ
収納箱を開けた状態と、箱に付けられた高野のメモ

と、印字したテープが貼り付けられている。冒頭のクリアポケットに、TBS の公用封筒に『夜間中学生』の撮影風景を岡本弘志が撮影した白黒写真（縦 17.5 cm×横 23.3 cm）が 19 葉、同じく白黒写真（縦 11.0 cm×横 16.0 cm）が 19 葉、その他のサイズの写真 2 葉が収納されている。

いずれも、荒川第九中学校二部の教員・生徒が一丸となって制作した映画であることを記録した写真群である。岡本が撮影したシーンは、まさに夜間中学生が自然体で夜間中学で学び、くつろぐシーンが切り取られている。また、夜間中学生の家庭の様子も撮影されている。そして、塚原雄太が自己の著書のなかで言及している、高野の要請によって塚原がカメラを回し高野が録音機に音声収録しているシーンもいくつか記録されている²¹⁾。

まさに、その後の高野の夜間中学に対する運動の変容によって、袂を分かつことになる塚原、見城慶和などの先生方の姿が記録されているのである。

最後の 4 葉の写真には、夜間中学の存続を訴えるデモのなかで、「夜間中学に太陽を」と書いたゼッケンを付けた高野、「夜間中学をつぶすな」と書いたゼッケンを付けた見城が撮影されている。まさに、荒川第九中学校二部の教員・生徒が一丸となって夜間中学の必要性を訴え廃止に危機感を持って行動している様子がわかる。

この高野資料のなかに、たくさんの数のオープンリールテープ（計 86 本）が存在している。

これらのオープンリールテープは、50 年以上という経年劣化のためテープが伸びてしまうなど状態が悪いものも多かった。そこで、これらテープをすべて CD への変換を業者に依頼して記録された音声の保存を図った。結果として、数巻は経年劣化のため変換が不能であったが、77 本（うち 2 本はケースだけで中身なし。7 本はテープ劣化のため変換ができなかった）のテープは無事変換することができた²²⁾。

上記の行政管理庁の勧告に危機感を募らせた高野が短期間に作成したのが、映画『夜間中学生』である。これは自分自身が卒業した荒川第九中学校二部の生徒の生きざまを撮影したドキュメンタリー映画である。完成は 1967 年。43 分の作品である。



図 5 高野がたった一人で編集し完成させた『夜間中学生』のタイトル

撮影協力者であった塚原が伝える映画『夜間中学生』完成までのエピソードは、まさに高野の執念ともいえるべき映画制作への傾注の様子が語られている。

- ・「夜間中学生の現実の姿を、ぶっつけたい」
- ・1本撮影ごとに、横浜の現像所（横浜シネマ現像所：筆者注）で現像しラッシュ（フィルム原版が傷つかないように、編集の作業用フィルムとして現像されたもの：筆者注）のチェックを行う。
- ・撮影期間は3カ月、編集に約9カ月。
- ・中古の編集機1台、フィルムセメント、スプライザー、ハサミ1本が編集のための用具であった（現在も、高野資料中に大切に保存されている：筆者注）。

結果として、無声フィルムを編集し、夜間中学生などにインタビューした音声から高野が必要と考えた箇所を切り出し（オープンリールテープA及びBとして現存）、それを無声映画フィルムに転写して有声映画として完成するといった映画制作の作業を高野はたった一人で行なっている。

この荒川第九中学校二部の学校をあげてのドキュメンタリー映画作成は、東京では話題になったことが高野資料中のアルバム帖第4冊に収蔵された新聞の切り抜き記事からうかがえる。

「サイケイ新聞」昭和42年6月5日の記事として、「ほくら夜間中学生」と題する記事が載せられている。「みんなで記録映画をつくる 荒川九中」「貧困の中の希望“ここだけが行ける学校”」などと表題があり、「行管庁はなぜ“望ましくない”というのか」と小見出しもある。記事には、高野の生い立ちから『夜間中学生』を制作するまでの過程を詳細に書き、最後に、つぎのような「塚原雄太先生の話」で締めくくっている。

「夜間中学校はまだまだ必要なのだということが、この映画でわかってもらえればさいわいだ。みせてほしいと言われれば日本のどこへでも見てもらいに行く。夜でなければ中学校にこられないものの本当の姿を知ってほしい」

もう1つ新聞資料が収納されている。「読賣新聞」昭和42年11月19日版に大きく記事（「若いなかま」46）になったことを伝える切り抜き資料である。「ほくら夜間中学生」というタイトルは、「サンケイ新聞」記事と同様の見出しを掲げ、「働き、学ぶこの姿 熱っぽく“全国上映”」「荒川九中の生徒たちが映画作り」と小見出しが配されている。記事の最後を次のような文章で締めくくっている。

四本つくったフィルムは、大学祭の教育サークルでもひっぱりだこだ。一本は、高野君が、今全国で、“放浪上映”中である。フィルムを右肩に、左に寝袋をかついだ高野君は、胸に自主製作映画『夜間中学生』上映中と大書して各地の高校や図書館を訪れ歩いている。この記事が活字になるころは、たしか、山口県下の定時制高校を、彼は訪れているはずである。

(有山記者)

この讀賣新聞記事は、有山記者の署名記事になっている。

そして、映画案内のチラシ、「24 才の中学生 高野雅夫」(塚原雄太執筆か)、ガリ刷り冊子(タイトル「風車」(夜間中学生) 映写会の感想から)、「夜間中学問題を理解するために」(ホッチキス止め 2 枚もののガリ刷り資料)、高野がガリ刷り印刷をした葉書(2 葉)、最後に、激励文 7 通やカンパ(7 名分)の封筒が入った封筒が収納されている。

高野が一人で編集した『자립』41 ページに、高野の自筆で「東京都内及び近県での叫び!」と題して、5 月 9 日に次々と上映会を開催した団体名が列記され、下欄に「上映-56 回、動員-5,849 名、文集-1,087 部」とある。

このように、東京都内などで高野が制作した『夜間中学生』は好意的に受け入れられ一定の反響があったことがわかる。これに気をよくした高野は満を持して全国での上映会を持つべく全国行脚に出発する。この時の状況を写真家橋本要が撮影して、後、焼き付けた写真を高野に提供している。



図 6 全国行脚に出発する高野雅夫
注:『자립』pp.42・43に掲載する写真の一部を転載。



図 7 高野資料中に残る映画『夜間中学生』を入れた 16 mm フィルム用ケース



図 8 映写用 16 mm フィルム

この写真(図 6 参照)をみると、高野は図 8 のフィルムを入れた図 7 のケースを背中に背負い、その上に、「夜間中学 □□ドキュメンタリー 夜間中学生 全口自主上映」と書いた布で覆っている。高野の全国行脚に賭ける意気込みが伝わる写真である。

高野は荒川第九中学校二部の学校をあげて協力して完成を見た『夜間中学生』の各地での上映の成果を、「わらじ通信」と題する葉書に詳細に書いて母校に送っている。高野の目的はあくまで映画『夜間中学生』の上映会を各地で開催し、夜間中学生たちの実情を多くの人々に知ってもらうことを目的としていた。

青森・北海道から始まる全国行脚の里程と高野の行動と認識の変容については、高野から「わらじ通信」の複写版の提供を受けて詳細に検討した寺田朱李の論文に詳しい²³⁾。

結局、高野は大阪に至る里程のなかで最後まで映画『夜間中学生』の上映を続けている。しかし、その目的は、夜間中学生の現状を広く認識してもらうための上映から、潜在的に市井に埋もれている学齢超過者で夜間中学で学びたいと思っている方々（高野は、このような方々を「生き証人」と呼称している）の発掘に重点が移っていく。

結果、大阪で7名の「生き証人」が名乗り出たことをきっかけに、1969年6月、大阪市立天王寺中学校夜間学級が新設される。これを基点に19校までに減少した全国の夜間中学の数は増加に転じることになる（図9参照）。

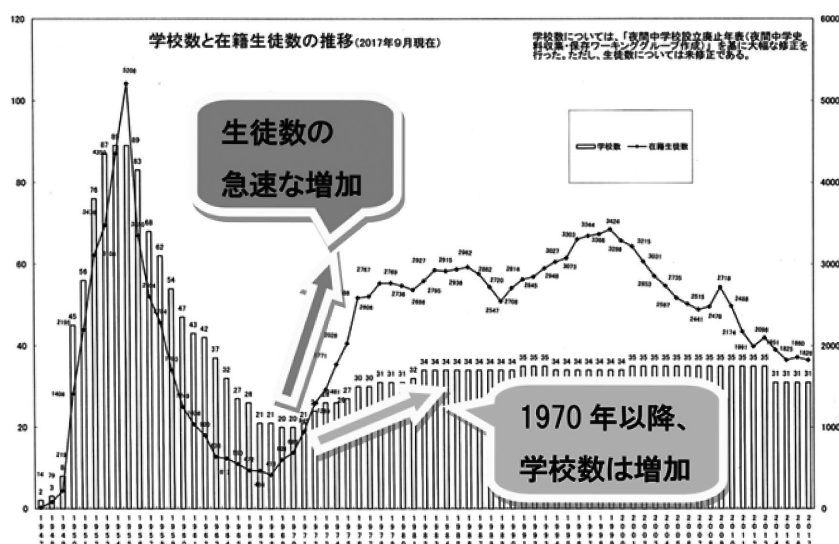


図9 全国の夜間中学の校数及び生徒数の推移

注：寺田が注（12）論文、p.147で提示したグラフを一部加工して転載。

おわりに—CDに変換された50年前の夜間中学生の肉声を現在の大学生が学ば—

筆者が勤めていた神戸学院大学に高野資料が一時的に避難してきた後、筆者も含めて夜勉で夜間中学について学ぶ作業を開始した。本稿において述べた『こんばんは』、『こんばんはⅡ』及び『学校』などの夜間中学に関連する映画も視聴して基礎知識を習得することに努めた。

ダンボール箱に詰められて搬入された高野資料をそのまま放置するにしのびず、一旦ダンボール箱から出して整理途中の状態を維持しつつ資料ボックスに入れる作業を行なった。その過程で映画『夜間中学生』を制作する際のマザーテープ及び高野が編集した無声映画フィルムに転写するための編集済み音声テープ2本が出てきた。高野の了解のもと、オープンリールテープをCDに変換する作業を行なった。その結果、77本のテープがCD音声として聞くことが可能になった。

これらの作業を横から見ていたゼミ生のひとりが、この CD 群に興味を持ち、卒業研究（神戸学院大学では卒業論文を「卒業研究」の名称でカリキュラム科目に設定している）テーマに選んだ。その結果、「50 年前のミネルヴァの梟は何を語ったか－証言映画『夜間中学生』が記録した現実－」と題する卒業研究が出来上がった²⁴⁾。

結果、出来上がった卒業研究は、まさに学生らしいアプローチに溢れたものになっていた。まず、演習時間に視聴した映画『夜間中学生』をなんとか卒業論文の紙面上で再現できないかと考え、映画の各シーンを静止画像としてデータ化し、映画の音声は逐一文字起こしをして再現することをコツコツと成し遂げたのである。同時に、聞くことが可能になった音声テープの CD 版の音声をすべて文字起こしを行い、高野は映画のためにどの部分を切り取って映画用音声テープとして編集したのかを調べる作業も行っていた。

50 年前に高野の差し付けるマイクに赤裸々に自分自身の境遇や思いを吐き出している。例えば、次のような夜間中学生の生活環境について語った音声が残されている。

- K：月 7,000 円くらいもらってる。私だって、
学校こなけりゃ、もっと取れるよ。
いい職場って、ないんだなあ・・・
- T：職場の食堂で食べるとさ、給料、5,000 円も残らない・・・
- K：日曜日、休んだのは、第 3 だけ・・・
- T：昼ごはん、忙しくて、食べる時間ない。
忙しくなると、すぐ、どなりつける・・・
- U：朝 4 時から 10 時まで、ごはん食べる時間、ない。くるしい・・・がまんがまんしている。
- N：家に金いれてる。お母さんは、何も言わない。お母さんの給料袋みたら、12 日だけ、5,962 円だった。
お姉さん、6 年間孤児院に預けた。今度は、他人の子を育てたいって・・・金になるから。
- N：親があまえちゃってる。反対になってる。住み込みは、絶対にしたくない。
- I：（一番ほしいのは）夜間中学
（一番いやだったことは）家庭がうまくいってないこと
- T：（家庭訪問をした先生に、祖母が：筆者注）
前の学校、体が弱いんで、付き添っていきましたんです。そしたら、大宮から来てる先生ですけどね、子に付いて来なければいけないのは、「あんた、親を殺した業を背負ってるんだ」と、こうざんすよ。
- T：仕事の帰りなんか、足が腫れて、靴が入らないのよね・・・
- I：学校でね、・・・があったとき、私のかばんのなか、ぜんぶ調べられて・・・いやだった。
- 夜間中学に来る前も働いていた。その家の高校に通ってる子の靴をみがかなきゃならない

の、いやになっちゃって・・・つらくて、死のうかな・・・なんて思ったことが3回もある。

そこには、50年前の夜間中学生の生々しくかつ率直に語った生の肉声が録音されており、それを引き出そうとする教員の声も残されている。

①そこには、単に義務教育を満足に受けることができなかった、というだけではなく夜間中学でしか学ぶ機会を得ることができない境遇が赤裸々に語られている。

そして、夜間中学生たちの、悲哀、怒り、前向きな姿勢、挫折、願い、そして、それを受け止めようとする教員の対応が記録されているのである。

②夜間中学が、決して、ユートピアではないことを夜間中学生自身が語っている。

このように随所に教員との対話、独白などが音声として記録されているのが、高野資料に残存するマザーテープ群である。その音声を切り取って証言映画『夜間中学生』の音声として編集したのが、一般に視聴できる『夜間中学生』ということになる。

この『夜間中学生』の制作のために録音した音声テープを素材に卒業研究を書いた村上は、『夜間中学生』の特徴を以下のように指摘できるとしている。

①誰ひとりとして、映画のなかで「夜間中学が必要だッ！」などとアピールするシーンはない。

②映画制作動機になった「夜間中学早期廃止勧告」を非難したり告発するようなシーンもない。

③映画に登場する教員を、持ち上げるシーンもない。

学生が素直にアプローチした結果の結論である。やはり現代の学生たちも教員への対応については敏感である。『夜間中学生』には随所に教員の行動が撮影されているが、その教員の行動を説明するような文字情報であるテロップも一切入れられていない。

淡々と夜間中学生の現実と夜間中学での真摯な学びのシーン、それに黙々と対応している夜間中学の教員たち、これだけが43分間描かれているのが『夜間中学生』である。高野にとって、ナレーターの言葉も、テロップも一切不要であり、余分な夾雑物を入れないありのままの「夜間中学生」と「夜間中学」そのものを見てもらうことが、最も効果的なメッセージだと判断していたと考えられる。

最後に、かろうじて音声テープは残存しているが、塚原が撮影したフィルムは、現像フィルムという限界のため、過去に高野が修復しようと努力したとのことであるが、プロの現像所でも不可能と言われ、すべて廃棄したとのことである。かろうじて残されたいくつかの16mmフィルムをDVDへ変換し得た図像からは、それが無声であっても強烈なインパクトをもって我々に迫ってくる。もし、経年劣化のために廃棄されてしまった現像フィルムが残存しており、しかも、それを現代の我々（学生も含めて）が見ることができたなら、『夜間中学生』の映像よりもっと衝撃的なインパクトを持って我々に迫ったきたであろうと考えたと残念である。

最後に、50年以上前の過去の資料である「夜間中学生肉声データ」であっても、現代の大学で学ぶ学生たちにとっても貴重な学びを得る重要なデータであることもわかった。数ある夜間中学関係映画のなかで、唯一感興を覚え卒業論文のテーマにする学生がいた点も、高野資料が単に過去の遺物ではないことを証明している点を強調して搁筆したい。

注

- 1) 斎藤博志「夜間中学と法制化－全国夜間中学校研究会の活動と教育機会確保法－」『専修大学教職教育研究』2号、2022. 2。関本保孝「『すべての人に義務教育を』求め続けた全国夜間中学校研究会の60年－」『日本の科学者』54巻2号、2019. 2。勝田美穂「教育機会確保法の立法過程－アイデアの政治から－」『岐阜経済大学論集』52巻2号、2018. 12。横井敏郎「教育機会確保法制定議論の構図」『教育学研究』85巻2号、2018. 6。など、様々な観点から議論されている。
- 2) 文部科学省 HP で確認できる。
- 3) 文部科学省 HP で確認できる。
- 4) これらの図及び表は、文部科学省の HP 上に掲載されている「夜間中学の設置・検討状況」から転載した。https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/yakan/index_00003.htm (2022. 10. 03 参照)
- 5) 神戸新聞 NEXT、7月20日配信のニュースが、8月18日付けで閲覧ができる。
<https://www.kobe-np.co.jp/news/himeji/202107/0014517053.shtml> (2022. 8. 21 閲覧)
- 6) 姫路市教育委員会「姫路市夜間中学設置基本計画（案）」2021.12。ネット上で閲覧が可能。
<https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/cmsfiles/contents/0000019/19708/kihonkeikaku.pdf> (2022. 9. 12 参照)
- 7) 産経新聞 特集教育・受験 埼玉県内発の公立夜間中学に尽力 野川義秋氏「長年の夢がかなった」2019. 4. 12。野川は、「今春、埼玉県初の公立夜間中学校が川口市に開校－実現の過程で明からになる様々な課題」『日本の科学者』54巻2号、2019. 2において、公立夜間中学の新設にともなう様々な課題について指摘している。
- 8) 筆者は、夜間中学でどのような授業が行われているのか、いくつかの夜間中学で授業風景を見学する機会を得た。担当教員の努力と情熱によって授業が行われている実情を見るにつけ、このような教育実践上のノウハウを共有することが重要であるとの認識を持つようになっている。
部外者である筆者などが、夜間中学の教育現場における教育実践上のデータを蒐集することなど不可能である。たまたま、1995年2月に阪神・淡路大震災で全壊した神戸市立丸山中学校西野分校跡の残された関係資料を整理する機会を持った（現在も整理中である）。そこには、多くの先生方の何年にもわたる教育実践の蓄積がファイルとして残されていた。欠席しがちな生徒に対する対応や苦悩を垣間見ることのできる資料も存在している。これに関する経緯については、水本・金益見編著『こんばんは、夜勉です。－大学生が夜間中学を学ぶ－』神戸新聞総合出版センター、2021のなかに、「2章 震災資料を学ぶ、から、夜間中学を名ぶ、へ」と題して書いておいた。
- 9) 筆者は、2019年に白井から直接データを参照させてもらう機会を得た。戦後の夜間中学について、まさに博覧強記と言ってもいいほどに詳細な資料的裏付けをしつつ、夜間中学の歴史をまとめた江口玲の『戦後日本の夜間中学－周縁の義務教育史－』（東京大学出版会、2022）には、まったく引用もされていない。貴重な実践ノウハウの集積とも言える白井のブログ発信データは、ネット上のデータとして消費され隠滅してしまうに任せられている。
- 10) 森康行「『こんばんは』から『こんばんはⅡ』へ－夜間中学校で出会った人たち－」『基礎教育保障学研究』3号、2019.8。
- 11) こんばんはⅡホームページと題した公式ホームページがある。<http://www.konbanha2.com/>。このホームページの冒頭に、「全国夜間中学キャラバン」とタイトルされた上映会の開催に関する情報が掲載されている。
- 12) 第50回全国夜間中学校研究大会実行委員会編『第50回全国夜間中学校研究大会記念誌』2004、p.128・129。高野雅夫が母校荒川区立荒川第九中学校二部へ送り続けた「わらじ通信」を分析した寺田朱李も該当箇所を論文に引用している。寺田「『わらじ通信』から読み解く、高野雅夫の夜間中学存続運動」水本浩典・金益見編著『こんばんは、夜勉です。－大学生が夜間中学を学ぶ－』神戸新聞総合出版センター、2021、p.133。また、戦後の夜間中学の歴史に焦点を当て、特に、神奈川県や東京都の夜間中学について分析をした論考も掲載した大多和雅絵も、第二章第二節「年少労働者に関する

行政監察」(1966年)とその勧告」のなかでも、「資料1-2-1『年少労働者に関する行政監察』勧告における夜間中学校に関連する部分」として夜間中学に言及した箇所だけを抽出して提示している。大和田『戦後、夜間中学校の歴史－学齢超過者の教育を受ける権利をめぐる－』六花出版、2017、p.125。また、戦後の夜間中学について幅広く資料を渉猟して大部な本にまとめた江口守『戦後日本の夜間中学－周縁の義務教育史－』東京大学出版会、2022でもこの勧告に言及しているが、分析の主眼は勧告への諸団体の対応や影響にあり、勧告文は提示されていない。同著、「第3章 夜間中学の再編－その過程と意義－ 第一節 行政管理庁勧告のインパクト」pp.155～162。

- 13) この「年少労働者に関する行政監察」については、『行政監察総覧－行政指導のあゆみ－』V、行政管理研究センター、1978、pp.240-269が全体構造をわかりやすく提示してくれており、各省・庁の回答及びその後の改善措置についての回答も整理して提示してある。
- 14) 第50回全国夜間中学校研究大会実行委員会が発行した『第50回 全国夜間中学校研究大会 研究誌』2004が末尾に掲げる「関連法律、条約、公文書等」に所収した「年少労働者に関する行政監察」は、冒頭の見出しに、『年少労働に関する行政監察結果に基づく勧告（夜間中学校早期廃止勧告）』と提示して、勧告文の関連する部分を掲載している。pp.128・129。
- 15) 塚原雄太『夜間中学－疎外された「義務教育」－』社会新報、1969、pp.229・230。
- 16) 前掲注12)に引用した大多和著、p.127。
- 17) 高野雅夫『ルンプロ元年 子傭－父・母の歴史を受け仇打ち－“連続射殺魔”永山則夫の「私設」夜間中学』（以下、『子傭』と略す）修羅書房、1975、pp.32・33。
- 18) 毎日新聞、1966年11月30日の記事。この新聞情報については、夜間中学情報資料室を主催する白井善吾から提供を受けた。白井によると、他の新聞ではより少ない分量の記事であり、夜間中学についての言及も少ないとのこと。夜間中学に最も多く言及しているのは、毎日新聞であったとのアドバイスをいただいた。
- 19) 前掲注15) pp.229・230。
- 20) 長栄夜間中学に保管されていた高野資料は、長栄夜間中学に保管することができなくなったため、一時的に神戸学院大学に緊急避難してきている。筆者は高野のご厚意を得て、この非公開の高野資料を閲覧し整理する手助けをする機会を得た。しかも、1年以上にわたって高野本人から貴重なご教授を得る機会も得た。なお、白井善吾ら有志による高野資料の整理と目録作り作業の概要については、白井本人からご教授をいただいた。
- 21) 前掲注17) p.38に、岡本から提供を受けたと推測される写真（アルバム第4冊では写真No.2）が掲載されている。
- 22) 高野資料がどのような経緯で神戸学院大学に一時的に緊急避難ともいえるかたちで搬入され、高野の好意によって閲覧が許された経緯については、前掲注8)「2章 震災資料を学ぶ、から、夜間中学を学ぶ、へ」のなかに書いておいた。pp.80-87。
- 23) 前掲注12) 寺田論文。
- 24) 村上優生「50年前のミネルヴァの梟は何を語ったか－証言映画『夜間中学生』が記録した現実－」注8)所収。

【付記1】

本稿は、高野雅夫氏が長年にわたって蒐集し大切に保存してきた夜間中学関係資料（本稿では「高野資料」と呼称）。総点数：約10数万点。そのなかには紙資料、映像資料、写真資料、音声テープ、もの資料など多岐にわたる。戦後の夜間中学の歴史を考えるうえで、必須の貴重な資料群である。幸い、筆者は高野から閲覧及び直接教授を受ける機会を得た。この資料なくしては、本稿は書けなかったと考えている。高野雅夫氏に深甚の感謝を表したい。

同時に、夜間中学卒業者の会に参加させてもらったこともたいへん貴重な勉強の機会になった。門外漢

の筆者を快く参加を認めていただいたメンバーの方々にもお礼を述べておきたい。

また、元守口市立第三中学校夜間学級の教員でもあった白井善吾氏には、筆者の素朴で基本的な質問などにも根気よく対応をいただいた。本稿には随所で白井氏の知見が含まれていることを明記して、感謝の意を表しておく。

[付記 2]

本稿は、2020 年度～2022 年度科学研究費・基盤研究©「夜間中学における教育実践とその学びに関する研究－夜間中学生の過去・現在・未来－」（研究代表者：水本浩典）の最終年度（2022 年度）における成果の一部を反映したものである。